九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッド『オイディプス』校訂版をめぐって

吉井，亮雄
九州大学大学院人文科学研究院教授

https://doi.org/10.15017/9223

出版情報：Stella. 26, pp.165-176, 2007-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

ジッド『オイディプス』校訂版をめぐって

吉　井　亮　雄

一般には小説家・批評家と見なされるジッドは，また劇作家としても認知されることを早くから欲していた。しかしながら彼は『カンドール王』上演の失敗（1901年のパリ初演の不評，そしてとりわけ1908年のベルリン公演の惨憺たる結果）以後，「公衆」にたいし強い警戒心をいだき，長らく戯曲の創作から遠ざかる[1)]。そのような彼が4半世紀を経てようやく執筆したのが『オイディプス』であった。周知のように，源泉のギリシア神話は青年期より作家の関心を引いていたもの。執筆計画は1922年頃から漠然としたかたちで浮上しはじめるが，独自の解釈をまじえた作品像が多少なりとも明確になってくるのは27年以降のことで，なおも曲折をへつつ30年11月に一応の完成を見る。

過小に評価されがちだが，コクトー『地獄の機械』やジロドゥー『エレクトル』，サルトル『蠅』あるいはアヌイ『アンチゴーヌ』に先んじ（そして『アンフィトリオン38』とほぼ同時期に）上梓され，現代フランスの神話劇に小さからぬ寄与をなしたこの作品の校訂版が今春，シャンピオン出版から公刊された[2)]。校訂者クララ・ドゥバールは同著元版によって2001年に博士号を取得，その後ナンシー第2大学准教授に就いた女性で，論文審査では『ジッドと演劇』で知られるジャン・クロードや，ジッド研究の第一人者クロード・マルタンの後継と目されるピエール・マッソンらが一致して高い評点を与えたと聞く。本稿では，校本作成にかんする若干の私見をまじえつつ，このドゥバール版と，もうひとつ別の『オイディプス』校訂版とを比較検討する。

＊

ドゥバール版の本体は解題125頁，校本（および草稿の転写）130頁，関連資料・書誌50頁からなる。解題は細かく章分けされているが，その実質的な構

成は以下のとおり――。作品の生成・執筆過程を論じた 19 頁が冒頭におかれ，次いで作家とオイディプス神話との関係に 12 頁，作品解釈に 60 頁，同時代の批評や受容に 10 頁，そしてジョルジュ・ピトエフ，ジャン・ヴィラールらの演出による各舞台上演の記録に 23 頁が費やされている。とりわけ作品の解釈や，舞台上演にかんする報告は内容的にもなかなか読み応えがある。だがそれらの紹介・検討は他の機会にゆずり，ここでは主としてテクストの校訂作業について論じたい。学術版の良否は，なによりもまずその編纂・校訂の厳密性にかかっているからである。

筆者はドゥバール版にたいして小さからぬ疑義を抱くものだが，それは一にかかって次の点による。すなわち上記解題中「テクスト校訂 établissement du texte」の説明に割かれたのが，自筆原稿や刊本の略号一覧を含めてもわずかに 1 頁半［135–136］という分量の少なさ，そこから窺われる校訂の粗雑さのゆえである。生成・執筆過程をあつかった冒頭部［11–29］では，『日記』をはじめとする既刊の資料や証言にもとづき，作品の暫定的な完成までの流れが記されていた。通常はこのような生成経緯と有機的に結ばれるかたちで各種の原稿や刊本の位置づけが試みられるものだが，ここドゥバール版では逆に，当然あってしかるべき記述の欠如や，実証的根拠を欠く性急な断定によってテクストの「歴史性」はいとも簡単に切り捨てられてしまうのである。

では実際に同版はテクスト校訂についてどのような説明をしているのか。段落ごとに内容を述べておこう。まずは第 1 段落――。現在パリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫に 102 枚の自筆原稿が，また作家の遺産相続人カトリーヌ・ジッド女史宅に 10 枚ほどの下書き草稿が保管されているが，いずれも紙質や色，版型がさまざまに異なる雑多な紙片群であり，それらを分類・系統化することはきわめて困難である。ギリシア語綴りの登場人物名 Tyrésias と Kréon がある時期から Tirésias, Créon に変更されているのが，年代推定の主要な指標と呼べる程度。初期草稿は残っておらず，小型カイエ 12 頁分が最も古い時期の草稿と思われる。またタイプ完成稿や校正刷も現存が確認されていない。

次いで第 2 段落――。『オイディプス』は単行出版に先立ち，「コメルス」および「新フランス評論」の 2 誌にそれぞれ全文が掲載された。このうち初出の季刊「コメルス」は 1930 年秋号と打たれているが，校正作業が予想以上に時日を要したため（チュニス滞在中のジッドが校正刷を受けとったのが 11 月 14

日，パリに宛て返送したのが12月2日)，実際の出来(しゅったい)もそれにつれて遅延した[3)]。その後「新フランス評論」がほぼ同一のテクストを31年2月1日号と3月1日号に連載。単行版としては，豪華紙をもちいた初版が慌ただしい校正を経て3月末にプレイアッド出版から，普及版も同年暮れに新フランス評論から刊出する。しばらく間をおき1942年にガリマール版『演劇選集』(『オイディプス』など5篇)，48年にイド・エ・カランド版『演劇全集』(第4巻収載）が出たが，ジッドは疲労と病気のために両版ともテクストの見直しはおこなっていない。さらに没後出版として観劇用のTNP版（1958年）およびコメディー・フランセーズ版(1978年)があるが，いずれも本文は42年のガリマール版を踏襲している。そして以上2段落の説明につづき，略号の提示を含む第3段落は「ジッドが生前修正を施した最後の版」として1931年の普及版を底本に掲げる旨を短く記して終わる。

さて以上の要約にもとづき，自筆原稿類の扱われ方から見てみよう――。まず何よりも驚かされるのは，ここドゥバール版では残存する紙片群について版型や紙の種類(透かしの有無を含め)，筆記具などの具体的記述がいっさいなされていない点である。たしかにそれら雑多な紙片群の分類・系統化が困難であろうことは十分に推察しうる。だがそうであればこそ（そして事後的に得られる成果の如何にかかわらず）テクストの生成過程を探るうえで欠かせないのが媒体(シュポール)の物質的側面にかんする精密な一覧の作成・提示なのである[4)]。いわゆる「コディコロジー」に立脚しないパレオグラフィー（文書学）には，机上の空論に堕する危険が常につきまとう。このことは改めて口にだして言うのも憚れるほど生成研究の原則であり要諦であるだけに，追検証のための材料をなんら示さず結論を急ぐその姿勢からは，校訂版作成者としての基本的な技倆さえもが疑われかねまい。

また資料体そのものも網羅性に欠け，完璧なものとは認めがたい。すなわちドゥバールはドゥーセ文庫現蔵の自筆原稿とカトリーヌ・ジッド女史所有の下書き草稿は参照・転写しているが，テキサス大学オースティン校ハリー・ランサム人文研究センターが所蔵するもうひとつ別の草稿（縦21 × 横14 センチ大の罫線入り用紙3葉，記述は黒色インクをもちい片面のみを使用）についてはその存在に言及することすらしていないのである。量的には小さな断片稿だが，すでに20年以上も前から現存が確認されていたものであるだけに，また同

センターがドゥーセ文庫に次いでジッドの原稿類を精力的に収集していることは専門研究者には周知であるだけに，この見落としは徹底した資料探索を求められる校訂版作成者にとって存外大きな失点といえよう。

さらに重大な不備は，今日に至るまで所在不明とはいえ，ひとつの到達点を映したはずの完成稿について如何なる説明も施されていないことである。執筆の経緯を追う解題が作品完成（1930 年 11 月 9 日）の事実指摘をもって論述を打ち切り［29］，それ以降の流れをいっさい無視するのは不可解至極，というのも直後数日間のジッド証言を照合しさえすれば，『オイディプス』には 2 つの完成稿が存在したことを容易に立証できるからである。以下，ドゥバール版の不備を補うためにもこの点を簡略に述べておこう。

ジッドは 10 月 28 日より滞在していた南仏ル・パンで『オイディプス』を脱稿するや，エリザベート・ヴァン・リセルベルグとともにチュニジア旅行に向け直ちにマルセイユへ移動，かの地からマルタン・デュ・ガールに宛てて次のように書く（11 月 11 日付書簡）――

> すべての最終的修正を唯一記載した『オイディプス』の原稿（la seule version d'*Œdipe* qui porte tous mes derniers remaniements）が黄色い革の鞄のなかに入っています。これを私の名前でホテル・スプランディッドに預けておきます。このことは事故でもあった場合を考慮して申しあげておくわけです。というのも今夜はものすごいミストラルが吹きすさんでいるからです……。しかも我々は明日乗船するのです。それでも貴方には，またお会いするまで，そう申しあげましょう。1 カ月後には帰国するつもりです。[5)]

盟友の依頼にたいしマルタン・デュ・ガールは「マルセイユに出かける口実ができるよう貴方の遭難を心から望む」とユーモアを交えた返書を送る[6)]。いっぽうジッド自身はチュニス到着の翌日（11 月 14 日），『日記』に次のように記している――「今日はひどい天気。読書と仕事以外には何もする気がおきない。郵便配達が『オイディプス』の校正刷を持ってくる」[7)]。

以上を要すると，まず 11 月 9 日にル・パンで脱稿，次いで 11 日に最終稿をマルセイユに保管，そして 14 日にチュニスで校正刷を受領，となる。これら一連の出来事をつき合わせれば，校正刷がホテル・スプランディッド保管の原稿にもとづくものではないのは火を見るよりも明らか。もうひとつ別の完成稿が

先行して（おそらくはジッドがパリを発つ10月27日よりも前に）「コメルス」誌に渡っていたことは確実である。またジッドの帰国後，「新フランス評論」誌の校正刷が「すべての最終的修正を唯一記載した」マルセイユ原稿を基に組まれたこともまず疑いを容れまい。付言すれば，2つの雑誌掲載テクストのあいだには30ほどの差異（大半は文体上の変更）が認められるのだが，これもまた細部において最終状態の異なる2つの完成稿が存在したことが主因と見て差し支えない[8)]。

つづいて刊本にかんする記述に話を移そう――。ドゥバールは1931年の普及版を底本に採るにあたり，その根拠としてこの普及版が「ジッドが生前修正を施した最後の版」であることを挙げていた。すなわち，後続の1942年版（『演劇選集』収載），1948年版（『演劇全集』収載）については「ジッドは疲労と病気のためテクストの見直しをおこなっていない」と断言するのである。各刊本が示す異文の比較検討にもとづき明確な基準を示したうえであるならば，同普及版を底本とすることはそれなりに首肯しうる選択肢であろう。だがドゥバールが掲げる根拠自体は明らかな事実誤認。後続の両版は程度の差こそあれ，いずれもがジッドの見直しを受けたのは確実なのである。まず42年版については，1973年のアルノール・ナヴィル旧蔵ジッド関連コレクションの競売のさいに『演劇選集』の自筆修正入り校正刷の存在が確認されている。また具体的な内容は不詳ながら，同じコレクションから出品されたナヴィル宛ジッド書簡集には，この選集の出版に「専念する」ジッドの書簡が含まれる[9)]。いっぽう48年版についても，ジッドが『演劇全集』収録作品の点検・修正に相当の力を注いだことは疑えない。版元イド・エ・カランドの社主で，ジッドの親友でもあったリヒャルト・ハイトが作家の没後まもなくに残した証言によれば――

> 戯曲は年代順に次々とジッドの手直しを受けた。彼が細かな修正しか施さなかった作品もあれば，もっと本格的に手直しする作品もあった。この仕事は数カ月に及んだ。というのもジッドはこの全集出版の機を利用して己の演劇の決定版を作ることを望んだからである。[10)]

「ジッドが細かな修正しか施さなかった作品もあれば」云々――そしてじっさい『オイディプス』には少数ながら明らかに48年版独自の異文が存在するのである。

資料探索の不徹底，書誌的記述の不正確を示す例はほかにもある。たとえばドゥバールは巻末書誌中の刊本一覧［307］で 42 年版の印刷完了日を「1942 年 4 月 22 日」と記すが，これは 47 年以降の刷版に記された法定納本の日付であって，初刷の奥付が示す本来の刷了記述は「1942 年 2 月」である（なお後の刷版では，作品テクストには初刷の組版を継続して使用するも，各作品冒頭におかれた概要提示の頁は新規組版による）。また同版からは 47 年 4 月，普通紙仮綴じ本とは別に，ポール・ボネのカルトナージュ装丁，シャテニエ紙使用の限定版として 1,040 部が刷られたが，そのことへの言及も欠ける。初刷の参照，異装本の指摘，これらはいずれも校訂版作成者の当然の「心得」ではなかろうか。

本節冒頭で触れたようにドゥバール版の作品解釈や舞台上演報告には見るべき点が少なくない[11)]。またジッドがピトエフと交わした 6 通をはじめ，計 13 通の関連書簡を活字化したことも評価に値する［298-306］。もし仮に同版が解題の主要部分と付属資料のみで構成されていたならば，十分にすぐれた研究書あるいは読解書と称しえたであろう。だが肝心のテクスト本体ははたして「校訂版」の名に見合うものなのか。本節での検討結果によるかぎり少なくとも資料体にかんする考証が粗雑であるのはすでに明白，必然的にその異文提示も恣意的との批判を免れまい[12)]。残念ながら同版は信頼するに足る作業成果とは認めがたい，これが筆者の率直な感想である。

＊

ドゥバール版の出来が満足のいくレベルであったならば，筆者があえてもうひとつ別の『オイディプス』校訂版を参照することはなかったも知れない。というのもこの版は，博士論文として 1983 年トロント大学に提出されたものの未だ公刊されてはおらず，研究者たちもまったくと言ってよいほど話題にすることがなかったからである。むろんドゥバール版はその存在すら指摘していない。当該論文の所蔵機関はトロント大学とカナダ国立図書館の 2 つに限られるが，幸いにも筆者は九州大学附属図書館をつうじカナダ国立図書館からマイクロフィッシュ版を借り受けることができた。以下，テクスト校訂の問題を中心にその概要を紹介し，また必要に応じて若干のコメントを付す。

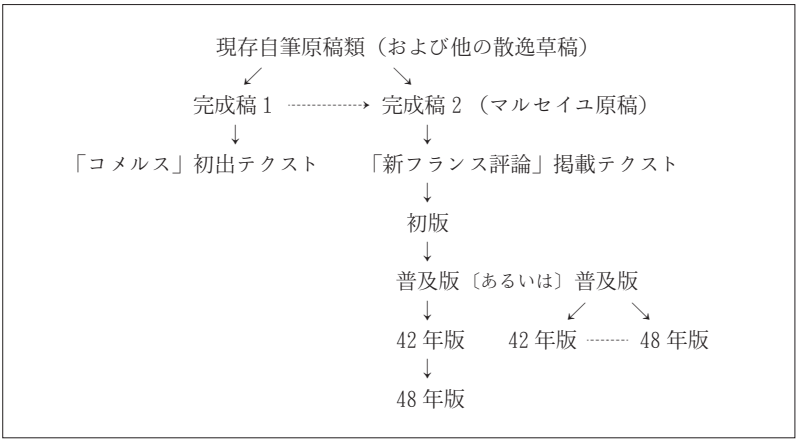
論文の著者はダイアン・キャロリン・フレミング，題目はまさに「アンドレ・ジッド『オイディプス』校訂版」，本文以外は英語で著されている[13)]。A 4 変形用紙にダブルスペース（引用・註などはシングルスペース）でタイプ打ちされた原稿の総量はドゥバール版と同程度であるが，解題の構成はいささか異なる。まず，後者が作品解釈に最大の分量を割いているのにたいし，このフレミング版では源泉のギリシア神話にからめた議論はあるもののけっして多くはない。むしろ舞台上演や同時代受容を丁寧に報告・紹介することで戯曲の意味を多角的に浮かび上がらせようとする［ff. 78–151］。だが何よりも大きく違うのは,「執筆と出版」［ff. 42–77］を論じた部分を別としても，テクスト校訂についての記述が相当の分量を占める点だ［ff. 152–199］。ドゥバール版の組版に換算しても 30 頁ほどにはなろう。

資料体の構成・内容から述べれば，このフレミング版はジャック・ドゥーセ文庫の自筆原稿のほか，ドゥバール版が見落とすハリー・ランサム人文研究センター所蔵の草稿を参照するものの，逆にカトリーヌ・ジッド女史所有の草稿にはいっさい言及していない。刊本も 1942 年版にかんしてはドゥバール版と同様，後の刷版を使用し，初刷には当たっていない（ただし実見したすべての刊本・掲載誌の印刷記録や奥付を明記しており，倫理的にはそれなりに周到である）。また同版の自筆修正入り校正刷の存在や 1948 年版の版元リヒャルト・ハイトの証言にも触れていない。

ほかにも実証面での不備はいくつか認められるが，自筆原稿類や刊本にかんする記述はドゥバール版のそれに比べれば格段に精密である。まず原稿類については，媒体の物質的側面（版型や紙の種類，筆記具，手書きかタイプ打ちかなど）を一葉ごとに細大漏らさず記録したうえで，視覚的にも見やすい一覧を作成している［ff. 160–163］。これによって雑多な紙片群のなかにも，それぞれ数葉から成るいくつかの小ブロックを同定することできるのである。たしかに原稿全体の執筆段階に対応した用紙の明確な使い分けは識別しがたく，そのため「用紙の種類や色といった物理的事実からは原稿の生成過程を再構成しうる有意の情報は得られない。よって一覧の意義も基本的にはネガティヴである」［f. 159］。――その言や潔し。また考証の成果がネガティヴだというのもあくまで現時点でのこと。今後新たに残存原稿類が発掘されることがあれば，それとの比較照合によってこの一覧の意義がポジティブなものに転ずる可能性がな

いとは言いきれまい。たとえ結論（あえて暫定的結論と呼ぼう）はドゥバール版と同一であっても，そこに至る過程を示し，情報を共有しようとする姿勢においては大きく異なるのである。

つづいてフレミング版は，当然のことではあるが先述のごとく2つの完成稿が存在した事実を指摘したうえで，異文の校合にもとづき刊本の系統を次のように確定する［f. 182］[14] ——



完成稿1から完成稿2へと引かれた破線は，後者が前者を基にして（すなわち「現存自筆原稿類ほか→完成稿1→完成稿2」と順を追って）作成された蓋然性が皆無とは言いきれないため。また表中右下方の分岐は，48年版が先行の42年版にもとづくのか，あるいは1931年の普及版を直接の参照対象（42年版を同時参照した場合も含め）とするのか判別しがたいことによる。

さて，このように刊本の系統を示したのち，フレミング版はドゥバール版と同じく普及版を底本に採る。理由は次のとおり——「異文の検討によって，自筆原稿類から雑誌掲載を経て普及版へと至るテクストの体系的修正が一連の流れを形成していることは明らかである。いっぽうそれ以後は如何なる体系的・包括的な見直しもジッドの手ではなされておらず，後続の刊本はいずれもが，普及版の出版で頂点に達した1930–31年の創作過程に与っているとは言いがたい。したがって同普及版こそが唯一の選択肢となる」［f. 189］……。

『オイディプス』のテクストが1931年の時点でほぼ形を整え終わったことに

異論の余地はなく，したがってフレミング版が普及版を底本とすることにはそれなりの説得力がある。だが疑問な点がまったくないわけではない。たしかに後続の 42 年版や 48 年版の修正箇所は少数だが，はたしてそのことが直ちに「体系的・包括的な見直しの不在」を証すと断言できるものだろうか。たとえば，丁寧に読み返しながらもジッドが旧作のテクストをほぼそのまま承認・踏襲した，そういった場合も十分にありうるのではないか。また，かかる想定とは反対に粗雑な校閲の事例だが，『ジッド全集』収載の『田園交響楽』の場合を喚起しよう。この版は「いくつかの例外を除き，独自の異文はすべて明らかな誤植」というほど不備の多いものだが，精緻な文献実証と説得的な読解で今なお評価の高いクロード・マルタン作成の『田園交響楽』校訂版（1970 年）があえてこれを底本に選んだのも，それがまがりなりにもジッドが見直した最後の版だったからである[15)]。いずれにせよフレミング版のような選択基準では，修正の多寡がことさら重視され，結果的にテクスト生成の「歴史」が分断されてしまう虞（おそれ）はないだろうか。

またフレミング版は刊本間の異同を，ジッド自身による「実質的異文」または「有意の異文」と，そうではないものとに分け，原則として後者を「真剣な異文照合」の対象からは外している。この後者には，たとえば «Acte III» と «Acte Troisième» のような，版元の「ハウスルール」に応じた表記差などが含まれる。42 年版や 48 年版のように他の戯曲との合本の場合には当然生じうる異同ではあるが，表記をいずれに統一するにしても本来「有意ではない」二者からの択一はあくまで便宜的なものでしかありえまい。だがこれはまだやむを得ぬ選択として理解できないではない。では，フレミング版が対照的な例として，「新フランス評論」掲載テクストと初版との異同のなかから抜いてみせる次の 2 組の場合はどうか［ff. 185-186］――

NRF : Il ne peut plus prétendre occuper la trône
初版 : Il ne peut plus occuper la trône

NRF : Je ne raisonne fort mal, la logique n’est pas mon fort
初版 : Je ne raisonne mal, la logique n’est pas mon fort

校訂者の説明では，最初の対にかんしては「«prétendre» の削除で〔文意の〕

一貫性が損なわれることはなく，読みにも支障は生じていない。それゆえこの削除が著者の手によるものかどうかは疑わしい」。いっぽう第 2 の対では「«fort» は〔重複を避け〕文体を改善するため明らかに著者によって削除されている」。かくて後者は異文として採られ，前者はそれに値せずと見なされるが，筆者にはどうにも納得しにくい分別の一例である。

もちろん総体的に見れば異文の検討が誠実・真摯に行われていることは疑えない。未刊とはいえ重要な研究成果である。そのことを認めたうえで，あえて一言感想を書き添えたい――。フレミング版の寄与を高く評価しつつも，筆者としてはその校訂方法に一抹の違和感を覚えざるをえない。それはひとえに同版が掲げる「理想的テクスト」の提示という観点のゆえである。校訂者によれば「理想的テクスト」とは「著者が書こうと意図したテクスト」[f. 199] であって，現実に印刷されたかたちで成立していたわけではない。語の表記を統一したり，不自然な句読法に最小限の修正を施すなど，ある種の操作・加工を前提とするこの方法自体はけっして珍奇なものではなく，紙幅の制約から異文の収載量を圧縮せざるをえない場合にプレイアッド版等でもしばしば採用されている。だが統一性や整合性を得んとして校訂者の主観的な価値判断が関与しがちなこともまた否定しがたい事実なのである。単に好みの問題とも言えようが，仮に筆者が『オイディプス』校訂版を作成する立場にあったならば，おそらくは底本には 48 年版を採り，また異文も可能なかぎり「化粧」を施さないかたちで提示するのではないかと思う。テクスト生成の流れが視覚的に捉えやすいこと（各異文を経て最終的に本文へと至る），本文と異文とを照合すれば，いつでも元の刊本各版を忠実に再現できること，まずはこの 2 点を優先したいからである。

＊

書誌とならぶ基礎的資料として作品や書簡集の校訂版は持続的な存在意義を主張しうるが，一般の需要はけっして大きくはなく，採算の点から見ても改訂版や新版を企図することは相当に難しい。校訂版が公刊されるや，他の研究者たちが速やかに本文や解題・附註の誤りを書評で指摘・訂正するのが（少なくともヨーロッパでは）慣習化しているのもこのためだ。既存の作業成果を基に

さらに精度の高い学術版を作り上げようという認識が共有されているのである。本稿執筆の意図もまさにそこに存する。公平な議論を期したつもりではいるが，意想外の誤解や失考もありえよう。識者のご批正を賜れば幸いである。

註

1）その間（かん）の唯一の演劇的実践として，1922年にはヴィユー・コロンビエ座（ジャック・コポー演出）で『サユール』(1903年初版）が上演されたが，劇評家たちの評価は賛否両論に割れ，ジッドに新作執筆を促すにはいたらなかった。

2）André Gide, *Œdipe*. Suivi de Brouillons et textes inédits. Édition critique établie, présentée et annotée par Clara Debard. Paris : Honoré Champion, coll. «Textes de littérature moderne et contemporaine» n° 92, 2007, 329 pp. なお引用・言及にあたっては本文中［ ］内に同版の頁数を示す。

3）ドゥバールは「『コメルス』は11月中には出ず」とだけ記すが，当時のジッド書簡数通の記述を照合するかぎり同誌が年内に刊出しなかったのは確実で，実際の出来は翌年1月10日頃のこと。ちなみにジッド自身は同月8日にパリに帰着。

4）こういった問題を手際よく論じた邦語文献として以下を参照――吉田城『「失われた時を求めて」草稿研究』，平凡社，1993年，29–35頁。

5）André Gide – Roger Martin du Gard, *Correspondance 1913–1951*. Introduction par Jean Delay, Paris : Gallimard, 1968, t. I, p. 422.

6）*Ibid*., t. I, p. 423.

7）André Gide, *Journal II, 1926–1950*. Édition établie, présentée et annotée par Martine Sagaert, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1997, p. 237.

8）完成稿が2つ存在したことから見て，それらが自筆原稿ではなく，タイプ原稿に自筆修正を施したものであった場合も十分に想定しうる。タイプ原稿をもちいたテクスト修正の事例は相当数に上るが，たとえば『狭き門』(1909年）のためには4部のカーボンコピーが作成されていたし，『オイディプス』初版・普及版と同じ時期に限ってみても，『ジッド全集』(1932–1939年）の各収録作品はタイプ原稿にもとづき見直しを受けている（ただしこの見直し作業が相当に粗雑なものであったことは後述のとおり)。

9）*Archives Arnold Naville concernant André Gide*. Vente aux enchères publiques du 8 février 1973 à l'Hôtel Drouot, Paris : Pierre Berès, 1973, item n° 9 : «*Théâtre*. / Paris, N.R.F., 1942 ; in–12, relié bradel demi–toile verte, non rogné. / Édition collective contenant *Saül* – *Le roi Candaule* – *Œdipe* – *Perséphone* – *Le treizième arbre*. / Épreuves corrigées sur lesquelles André

Gide a ajouté des indications autographes concernant les dates de création ou d'édition des cinq œuvres du receuil […]». Voir aussi item n° 10, *Correspondance autographe avec Arnold Naville, 1918–1950*.

10) Richard HEYD, «André Gide dramaturge», *Revue de Belles–Lettres*, vol. LXXVII, n° 6, novembre–décembre 1952 [parution mars 1953], pp. 10–11. ハイト証言の詳細および関連資料については，次の拙稿を参照されたい――吉井亮雄「ジッド『放蕩息子の帰宅』校訂版補遺」，『ステラ』第 24 号，九州大学フランス語フランス文学研究会，2005 年 12 月，168–170 頁。

11) ただし舞台上演について付言すれば，関連文献として 1931 年 12 月アントワープでの上演（ピトエフ劇団）にかんするマリー・ジュヴェールの証言が取り上げられていないのはいささか気になるところ。このベルギー初演にはジッド自身が立ち会い，ジュヴェールもその折りの模様を伝えているだけに残念な欠落である。Voir Marie GEVERS, «La mort de Max Elskamp, et la création de l'*Œdipe* de Gide, à Anvers le 10 décembre 1931», *Bulletin de l'Académie Royale de Langue et de Littérature Françaises*, t. XXXVIII, n° 1, année 1960, pp. 15–23.

12) ちなみに異文は伝統的な提示方法にしたがい各頁の下部に略号とともに配列されているが，本文テクスト（底本）のなかに振られた 1600 ほどの註番号は通し番号によるため，後半部では 4 桁の数字が各行に 4 つ，ないし 5 つ並ぶ場合が頻出し，視覚的にたいへん煩わしい。番号付を各頁起こしにする，微細な異文はいくつかまとめて提示するなど，たとえ校訂版であっても通読に耐えうる工夫が求められよう。

13) Diane Carolyn FLEMING, *A Critical Edition of André Gide's «Œdipe»*. Ph.D. Dissertation, University of Toronto, 1983, 2 vol., 522 ff. 引用・言及にあたっては本文中［ ］内に同論文の頁数を f. ないし ff. とともに示す。なお著者フレミングは現在トロント大学で社会人教育のためのフランス語を講じているらしい。

14) 表中，自筆原稿類・刊本の呼称は本稿の論述に合わせ適宜変更している。

15) Voir André GIDE, *La Symphonie pastorale*. Edition établie et présentée par Claude MARTIN, Paris : Lettres Modernes Minard, 1970, pp. CLI–CLII.